レトロ

藤原 平城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レトロ

【Ｎコード】

Ｎ９５２０Ｕ

【作者名】

藤原　平城

【あらすじ】

三題小説。テーマ＝【電球、竹馬、看板】

［ＦｕｊｉｗａｒａＨｅｉｊｏ．ｃｏｍ、ｐｉｘｉｖ に重複投稿］

薄暗くなった路上に、竹馬の影が長く伸びる。
我が子の帰りを待つ家には、円錐形の傘をかぶった白熱電球が灯っている。納屋の外壁に釘で打ちつけられた蚊取り線香の看板は、夕陽に映えて茜色に染まり――
「この『蚊取り線香』ってのは、なにに使うんだろうな」
そんな声と一緒に頭上から降ってきた鈍色の玉を、私は無感動に捕球する。
レトロ調ガンマ蛍光電球は、白熱電球とは違って熱をほとんど発しない。寿命も比較にならないほど長い。それでもたまには故障するから、こうして私たちが交換することになっている。

私が新品の電球を放り上げると、彼は竹馬を片手に持ち替えて電球をキャッチした。
そろそろ七万回に達する交換作業において、彼は電球を一度も取り損ねたことがない。
当然だ。ちょうど彼の手元で相対速度がゼロになるように計算した上で、私は電球を投げているのだから。

交換後に照明のスイッチを再投入すれば、大きな看板に描かれた絵が数百個の蛍光電球に照らされ浮かび上がる。
《レトロミュージアム・一九六〇》
つまり、一九六〇年ごろに作られて、現在ではもう見られない品物や風俗を紹介するための博物館だ。もっとも、実際に白熱電球や竹馬が展示されているかどうかは知らない。私も彼も入館権限を持っていないし、そもそも私は展示物に興味がない。
そういうことになっている。

直後、新しく発生したばかりのアラートを受信した。
「今度は《レトロミュージアム・二〇二〇》の看板で電球が切れたみたいよ」
「いちいち言わなくてもわかるよ」
そう答えた彼は竹馬に乗ったまま、こつ、こつと隣の看板の方へ歩き始めた。竹馬は大きなステップをサクサクと刻んでいく。
頭上に向かって私は尋ねる。
「竹馬から落ちたらどうなるの？」
「僕が落ちるわけがないさ」
わかっている。竹馬から転落するプログラムは、彼には搭載されていない。
それは、竹馬を操るプログラムが私に搭載されていないのと同程度に明らかだ。
そういうことになっている。
「二〇二〇の看板に描かれているバーチャル・アイドルは君にそっくりだな」
頭の上から彼の声が降る。この言葉を聞くのは三百九十四回目だ。
私も同じルーチンに沿って返答する。興味がないわ。
そもそも、私たちを作った人類は、もうこの世界にはいない。
人類が私たちを作った理由も、レトロミュージアムを作った理由も知らない。レトロミュージアムを見物に訪れる者もいない。
それでいい。そういうことになっている。

けれどどうして《人類のミュージアム》がないのだろう。
今ではもう見られないものなのに。

《了》

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9520u/

レトロ

2011年10月9日06時35分発行